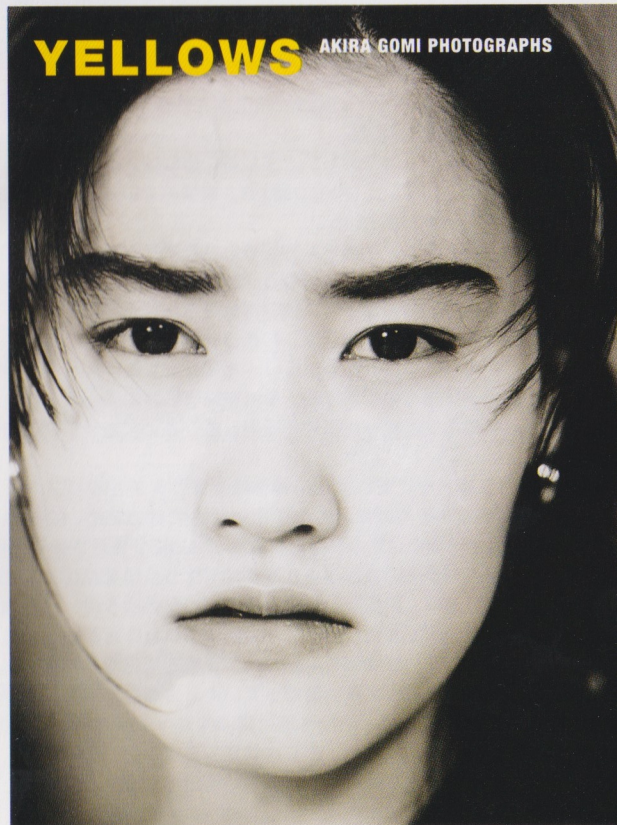




YELLOWS

AKIRA GOMI PHOTOGRAPHS



黄色の裸体 中 沢 新 一

ここにあるのは、彼女の黄色い裸体だ。

この裸体は美しい。しかし、それを美しいと感じるためには、ぼくたちは自分の知覚にこびりついた、近代のクリシェ(絞切り型)を、まずぬぐい去ったうえで、この裸体にむかいあわなければならないのだ。

黄色い裸体が感じさせるものは、もちろん均整のとれたギリシャ的理想の美などではない。彼女は裸になることによって、むしろ、それとはまったく異質な美しさが存在することを、あらわにしてみせる。黄色い裸体もまたひとつの自然だが、その自然は、白や黒の裸体が発散するものとは、あきらかなちがいを感じさせる。そのちがいをみきわめるのは、きわめてむづかしい。ただナチュラリスト(自然観察者)の緻密な観察と、黄色い裸体への愛だけが、それをあきらかにすることができる。目をこらせ。神経の束となった指先で愛撫しろ。ここに立っているのは、ひとつの謎なのだ。

あらゆる神は細部に宿る。そこで、黄色い裸体を愛するナチュラリストは、そのルーベを、彼女の細部にそそぐのだ。この黄色い裸体においては、くるぶしがシャープな曲線を描くことはなく、足の薬指と小指はすなおにつきだされるかわりに、内側に向かって微妙なカーブを切りながら、不思議なはじらいを見せる。衣服を着ていたときにも、彼女の足は、むきだしの露出をこぼむかのように、陰をもとめていたが、こうしてすべての衣服を脱ぎ去り、その裸身のいたところが光にさらされようとしているときでさえ、彼女のその部分は、まるで陰花植物のように、存在しない陰をもとめて、優しく内側に折れ曲がっていく。力をこめてずんと伸ばしてみせてもだめだ。彼女の足の指は、いつも無意識に内側へ向かおうとする誘惑が、彼女のうちにわきあがっていることを、感じさせてしまうのだ。昔の中国人でもないのに、彼女の足は、目に見えない纏足をはいているかのようだ。それは、自分を

束縛するためではなく、「見る」という行為がひとつの「あばき」であることに抵抗しようとする意志をあらわすために、自分から望んで身につけた纏足だ。

彼女の足が語っている。

「裸体、それはあばきではない」。

黄色い裸体にとって、裸になることは、隠していたものをあらわにすることではなく、衣服をまとっていたときには感知できなかった、もうひとつの別の空間のなかに身を隠すことでもある。そんな空間がどこあるのかって？彼女の足の指に聞いてみるのだ。それは、足の指が微妙なカーブを描きながら、さししめそうとする目に見えない陰のなかに、ひそんでいる。

彼女の股が、いつも心なしか内側に向かって閉じていこうとしているように感じられるのも、そのこととつながりがある。衣服を脱ぎ、光のなかに裸身をさらしていることを恥じらって、彼女は内股になっていくのではない。どんなに堂々として、その美しい(ぼくはそれを、ほんとうに美しいと思う)裸体をカメラや人々の視線の前につきだそうとしているときにも、黄色い裸体の深層では、光のなか、存在するものの世界のなかに踏み出して、自分をあらわにしていこうのではなく、微妙なカーブを描きながら、隠すこともあばくこともはやいたし意味をもたなくなる別の空間が、彼女の裸体とともにそこにあらわれていることをしめすために、彼女の下半身は、いつも内側に折れ曲がっていこうとするのだ。黄色い裸体の神秘がここにある。裸になった彼女を、よく考えもせずに「ヌード」とよんだりすることはつつしまなければならない。ヌードとは、隠されてあったものを、あばくことだ。しかし、黄色い裸体は、隠されてあったものではない。この国では、自然の秘密は奥に隠されているのではなく、いつも表面にさらされてある。そう、ここでは表層こそが神秘であり、女の裸体が、そのことを証拠だてている。

表層は目で見ることができない。なぜなら、この国の文化には、もともと光にさらされた表面とその奥に隠されたものという二元論がない。そのために、世界にあるものはすべて、自分をあらわにすると同時に自分を隠していくというやりかたで、

存在してきた。だから「あばく」ということが、重要な意味をもつことがなかったのだ。黄色い裸体の国では、哲学でさえそうだった。ロゴスというギリシャ語には、隠されてあるものをあらわにするという意味がある。ぼくたちの哲学は、そういうロゴスをめざしてはこなかった。芸術もまたそうだった。芸術は、世界の奥底に隠されているものを、光のなかの形態と色彩としてとりだしてくるのではなく、目に見えない表層の動きを別の表層のなかにうつしかえる技のことを意味しているのだ。だから、黄色い裸体の国の画家たちは、ヨーロッパ人に教えられるまで、けっしてヌードというものを描こうとはしなかったのである。ヨーロッパ人にとって、女性の裸体は、人間に隠されてある自然の神秘を光のなかにひきだす、芸術という行為を象徴するものだと考えられていた。そのために、画家たちは、あくことなく、白い(ときには黒い)女性の裸体を、描きつづけたのだ。ヌード、それは彼らの精神的伝統の魅惑にみちたあかしだ。ヌードになった白い裸体は、光のなかに、自分の存在をつきだしてくる。そら、ここに世界の根源がある。あなたたち見たがっていた。あの「隠されてあるもの」が、私たちの裸体とともに、ここにあらわれているのだ。これを描け。むきだしにされた自然。裸になった真理。芸術の原点としてのヌード。白い裸体たちは、そこで足の指を大きく伸ばし、まっすぐ足をそろえて、光のなかで輝いてみせる。彼女たちが、恥じらってみせるときも、それは何かを隠すことで、自分の値打ちをつりあげるためのこづみにすぎない。彼女たちは、黄色い裸体のように、すっ裸になっても不思議な陰をかかえたままの、そんな裸のありかたが理解できないだろう。すばらしい黄色い裸体を描こうとしなかったこの国の画家たちは、それでは女性の裸体に魅力を感じていなかったのだろうか。

そうではない。彼らは、女の肉体の魅力を、その指先きで知り抜いていた。だが、彼らは、女を描くの、彼女たちの裸体を描く必要を感じなかっただけなのだ。画家は、女のエロティシズムを表現するためには、彼女の足首を描くだけでじゅうぶんであると考えていた。顔でもない。手でもない。ましてや、彼女の全身を裸にむく必要などさらにはない。彼女のエロティシズムのエッセンスは、内側の目に見えな

い陰に向かって、微妙にカーブしていく足の指を描くことでつくされるとさえ、考えていた。その陰にひそむ別の空間こそ、女性の実在が住まう場所で、女は裸になることで、自分をあらわにするのではなく、ぎゃくにその空間のなかにたちもどっていく生き物なのだ、ということ、画家たちはほかの誰よりもよく心得ていた。そのために、あの春画(ポルノグラフィック)でさえ、性の快楽に没頭する彼女たちを裸にむこうとはめったにしなかった。浮世絵を見てみるがいい。そこでは、彼女たちは、着物をまとったままで(画家たちは、不思議なことに、ヨーロッパのヌードであれほど重要だと考えられていた乳房にさえ、ほとんど関心をしめさなかったのである)、むきだしの下半身を大きく開き、巨大な男根をくわえこんだその陰部から、おびたしい愛液を流し、そして、快感が彼女のからだをつらぬいていくたびに、内側に向かって激しく収縮し、折れ曲がっていく足の指を、宙に泳がせている姿として、描かれた。

画家たちがそこに描こうとしたのは、女のからだに息づいている欲望する自然のすがただった。しかし、その自然は隠されてあったものではない。快感にふるえているのは、世界の根源などではなく、はじめからそこにあった自然という欲望する機械の表層にすぎないのだ。「あばき」の行為に、深い意味などない。裸体そのものは、エロティシズムではない。エロティシズムは、むしろ、あの足の指のカーブにひそんでいる。自分を視線にさらすとともに、その視線からたえず目に見えない陰のなかにしりぞいていこうとする、微妙な動き。それが、黄色い裸体のエロティシズムの極致なのだ。

こうして、足先の観察をおえたナチュラリストは、ルーペをおいて考えこむ。ヌード、それはぼくたちの精神の伝統ではない。それならば、ここのあるのは、いったいなんなのだ。かくも美しく、かくも魅惑的な、この黄色い裸体。この裸体の魅力は、いまだに語りつくされたことがない。いや、それどころか、まともに語られたことさえないのではないだろうか。それをこれから語ってみよう。ナチュラリストは、ふたたび愛をこめたまなざしで、彼女の黄色い裸体にむきなおるのだった。



YELLOWS デジタル版発刊にむけて

五味 彬

「YELLOWS」とは私達黄色人種の意味で、日本人の体型の記録として撮り始めたもので、1989年は書房からB4型16ページ、2名のモデルからスタート。1990年流行通信でイタリアのファッションフォトグラファー、トニー・メネグッツオ氏と「SIMPLY YELLOWS」のタイトルで連載10名撮影、写真集「Nude of J」(朝日出版)として発表。1991年集英社月刊プレイボーイ誌で「東京ギャルシリーズ」として連載が始まるが、シリーズ第3回目の撮影が終わった時、突然、連載が中止される。その後一カ月もたたぬ時、大手出版社からそのシリーズを写真集にしないかと誘いがあった。全く渡りに船の話だった。

編集段階で第一の問題はヘアーの修正するか否かという事で、私としては無修正が第一希望だが、この写真集は体型の記録という事なので、出版社サイドで必要なら修正しても構わないとし、サンプルプリント数枚を編集社に渡し上司の決裁をおおぐ事になった。結果は無修正でいくという事になり、10月中旬には表紙の校正が上がり、束見本に装丁したものを当時肺ガン末期で闘病中の母に見せる事が出来た。「YELLOWS」の発想はもともと母の言葉からだった。ファッション写真という仕事上モデルの大半が外国人で、そんな私の写真を見ている母はある日こんな事を言った。「なんであなたは外人さんしか撮らないんだい。最近の子(日本人)は、みんな背も高くなっているのに…」

「YELLOWS」発売まであと2週間という日に母は自分の言葉から息子が始めた仕事の完結を見ずにこの世を去った。

1991年11月印刷、製本が完了し、配本3日前に担当編集長から発売を中止するとの連絡があった。その理由は社長の決裁という事で詳しくは伝えられなかった。その後一カ月に渡り、担当編集長、担当役員と製本された5000冊の処置について話し合いがもたれた。アートディレクションを担当した横山氏と私は何とか「社長を説得、発売できないか?」「外国で発売する事はできないか?」「図書館または写真・美術関係の学校に寄贈配布出来ないか?」「5000冊、20万ヶ所以上の部分にこちらで修正を入れるので発売できないものか?」という最終提案も受け入れられず、出版社側の税務上という勝手な理由で「断裁」という結果になった。

1992年1月、なぜ印刷、製本する前に中止しなかったのかという大きな悔いを残し、写真集「YELLOWS」5000冊は断裁され、古紙業者に渡された。

この「YELLOWS」CD-ROM版は断裁された写真集に使われたオリジナルプリントを紅屋スキヤンの石塚氏にスキヤニングをお願いし、写真集と同じ構成で編集されたものと、PhotoShopで着色加工したDigital Versionが収録されている。

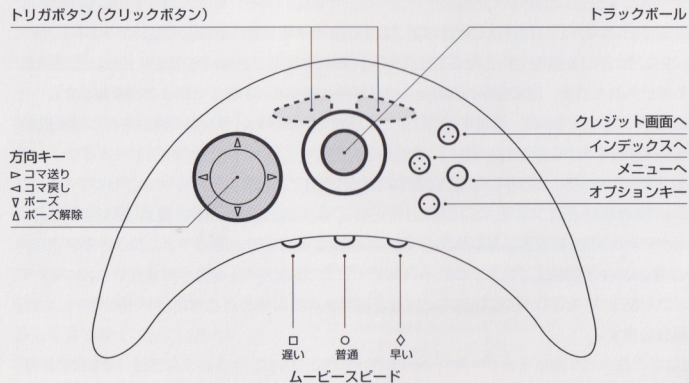
最後に、この「YELLOWS」CD-ROM版の制作のプロデュースしてくださったプロペラ・アート・ワークスの江並直美氏と無修正掲載を承諾してくださったモデルの方々に深く感謝致します。

1993年2月

INSTRUCTION YELLOWS for PIPPIN

「YELLOWS」では写真のテイストを壊さぬよう、あえて画面内にインタラクティブボタンを設定していません（インデックス画面を除く）。コントローラのキーを押すことで、ユーザーがムービーをコントロールできるように設計されています。

ムービー再生中の操作



インデックス画面での操作

任意の写真を見たい場合 …………… 写真をクリック（トリガボタンを押す）
任意の写真からムービーを始めたい場合 …………… オプションキーを押しながら写真をクリック

NOTICE 使用上の注意

- 「YELLOWS」は640×480ピクセルの解像度を標準に設計されているため、小型の不鮮明なテレビモニターでご鑑賞の場合、一部文字などが読みにくくなる場合があります。
- 「YELLOWS」を投影式のテレビやプロジェクターで鑑賞すると、画面焼けの生じる場合がありますのでおやめください。
- サウンドは入っておりませんので、ボリュームを上げるのはおやめください。

REQUIREMENT 推奨システム

PIPPIN ATMARK専用（一般のMacintoshでは使用できません）

- 「YELLOWS」はMacromedia社のMacromediaDirector4.04を使用して制作されています。
- 「YELLOWS」に含まれている全てのデータには著作権保護が与えられており、権利者の許可なく、レンタル、売買、再販することは禁止されています。
- 社名および商品名は各社の商標および登録商標です。

Copyright ©1993 AKIRA GOMI, DIGIALOGUE Co.,Ltd. All rights reserved.
PIPPIN and the PIPPIN logo are trademarks of Apple Computer, Inc.

本作品に関するお問い合わせ先

DIGIALOGUE Co.,Ltd. 〒150 東京都渋谷区神宮前3-36-20 TEL. 03-5474-7741 FAX. 03-5474-7744
DIGIALOGUE GALLERY 〒150 東京都渋谷区神宮前3-27-7 TEL. 03-3408-2494 FAX. 03-3401-5933



YELLOWS *for* PIPPIN

DIGITALOGUE HOME MUSEUM SERIES -1

PHOTOGRAPHS AKIRA GOMI
PUBLISHER NAOMI ENAMI

PREFACE	Shinichi Nakazawa	Special Thanks to	PLAY BOY Japan(Shueisha)
HAIR & MAKE-UP	Kazuhiro Amano Katsuya Kamo Takeo Arai Tomita Sato		Fashion News Mod'sHair Maniatis Japon Studio You Studio Hs' Haru Shobo
CASTING	Hiroyuki Yoshida		BANDAI Co.,Ltd.
CD-ROM STAFF	Marki Kimura (Propeller Art Works) Yukie Ito (Propeller Art Works) Atsushi Fukasawa (Propeller Art Works) Ayumi Koike Shin Kobayashi (Studio Hs') Satoshi Ishii (EGG) Kobayasi Hazime		Kazunari Tajima John Chan Masahiko Nishitani Haruo Matsuya Kaoru Amemiya Harumi Koide Hiromi Kyodo Shuhei Takahashi
TRANSLATION	Setsuko Naruse John Bosnitch		

DIGITALOGUE CO., LTD.

3-36-20 Jingumae, Shibuya-ku, Tokyo 150 Japan TEL. 03-5474-7741 FAX. 03-5474-7744

DIGITALOGUE USA, INC.

Bergamot Station, B-5b, 2525 Michigan Ave., Santa Monica, CA 90404 TEL. 310-453-4999 FAX. 310-453-0699

DIGITALOGUE WORLDWIDE DIVISION

PRODUCED BY DIGITALOGUE Co.,Ltd. PROPELLER ART WORKS Co.,Ltd.

Copyright © 1993 AKIRA GOMI, DIGITALOGUE Co.,Ltd. All rights reserved.

No part of this data may be reproduced, stored in a retrieval system or transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording or otherwise without the prior permission of the publisher.

DIGITALOGUE Home Museum Series 発刊に際して

テクノロジーの発達、人間の生活様式を変革させました。コミュニケーションの在り方もしかりです。そして、昨今の電子テクノロジーのめまぐるしい進歩は、まさに20世紀最後の、コミュニケーション革命をもたらそうとしています。

たとえば、マッキントッシュのQuickTime技術の発達は、音、ビジュアルなシンボル、そして動く映像が同時に扱える環境をつくりあげます。

しかし、そんな技術やハードウェアの進歩に較べて、それを十分に生かしきる表現はまだ育っていません。

そんな状況の中で、とりあえず出来ることから始めていく。そこから、電子メディアの奥深い可能性を探っていく環境を、DIGITALOGUEは考えていきます。既製のメディアのもつ完成された表現方法をいかしつつ、まったく新しい体験と感性を構築していく。コミュニケーション・メディアをどう見せるか。どうやったら、使う人の思考を刺激できるか。従来の発想や考え方の範疇を越えて、まったく新しい言語としての表現を模索する必要があります。そうやって生まれてくるマルチメディアは、新しい視聴覚体験を生みだしていきます。そして、その体験は新しい表現をうみだしていくのです。

ビジュアル表現のまったく新しい言語、それは21世紀にむけての、意識の冒険と変革の旅だちであり新しいフロンティアなのです。

実験的な作品やかつての名作、そして発表されていない優秀な作品をデジタルメディア化、そしてエレクトロニック・コミュニケーションを推進していくContents Publication。

それが、DIGITALOGUE HOME MUSEUM SERIESです。ご期待ください。

DIGITALOGUE General Producer 江並直美

DIGITALOGUE Gallery

デジタログ・ギャラリーは、世界初の、コンピュータモニタによるデジタル作品を展示するスペースとして1992年のオープン以来、既に数多くの方にご来場いただいております。また、「マッキントッシュ」「フロッケ展」等、インディーズ系のフロッピー・メディアの企画や支援活動も行っておりまいた。今後もマルチメディアに限定されず、デジタル時代の新しい表現やカルチャーを生む場として、活動を続けてまいります。エレクトロニック・コミュニケーションは、デジタログから始まります。

- 電子メディアの新しい提案をお持ちの方、随時受け付けております。また当社にて審査の上、インディーズ・フロッピーなどの委託販売もお受けしております。お気軽にご連絡ください。
- DIGITALOGUEが発刊する国内外の一流アーティストのマルチメディア作品シリーズは、当ギャラリーにて常時観賞することができます。

新作案内、展覧会情報をお送りします。ご希望の方は、氏名、住所、年令、職業を明記の上デジタログギャラリーまで、ハガキまたはFAXでお申し込みください。

デジタログギャラリーUSA誕生

アメリカ、サンタモニカにデジタログギャラリーがオープンしました。アメリカに日本のマルチメディアアートを紹介します。また、アメリカ版フロッケ展、マッキントッシュの開催などの企画も始まります。

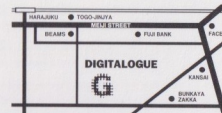


DIGITALOGUE Gallery USA

BERGAMOT STATION, B-5b
2525 Michigan Ave., Santa Monica, CA 90404
Phone. 310-453-4999 Fax. 310-453-0699
Open hour 10:00-18:00 Closed on Monday

DIGITALOGUE Gallery Tokyo

〒150 東京都渋谷区神宮前3-27-7
Phone. 03-3408-2494 Fax. 03-3401-5933
AM11:00-PM7:00 (月曜定休)





DIGITALOGUE HOME MUSEUM SERIES -1

YELLOW

for PIPPIN

AKIRA GOMI PHOTOGRAPHS

BDS-20001



PIPPIN専用 CD-ROMソフト (Macintoshでは動作しません)

本製品の全部または一部を当社に無断で複製することを禁じます。著作権者の許諾なく、本製品をレンタルすること、公開上映すること及び地上波、衛星波、ネットワークにより送信することは法律により禁じられています。本製品の輸出を禁じます。

FOR SALE and USE IN JAPAN ONLY. BUSINESS USE and RENTAL PROHIBITED.

PRODUCED BY DIGITALOGUE Co.,Ltd. PROPELLER ART WORKS Co.,Ltd.

Copyright © 1993 Akira Gomi, DIGITALOGUE Co.,Ltd. All rights reserved.

PIPPIN AND THE PIPPIN LOGO ARE TRADEMARKS OF APPLE COMPUTER, INC. MADE IN JAPAN